

教育的価値	具 体 の 項 目	教育課程
2【かかわる】	⑫【自分と地域社会】 自然災害が、暮らしの変化や地域経済に与える影響について理解し、自分と地域社会との関係について考える。	生活・総合

【題材】

被災地との交流（久慈市立久喜小学校と野田村生き生きサロンの方々）

もやい

舳

【対象】

全校児童36名（1年6名、2年5名、3年9名、4年7名、5年3名、6年6名）

【実践の概要】

本校では、昨年、被災地の久慈市立久喜小学校との交流や被災地の駐在さんの講演会を通して、地震や津波の被害の状況の現状把握と自分たちが今出来る活動を考えさせてきた。

今年度は、引き続いて久慈市立久喜小との交流（磯観察）、野田村生き生きサロンの方々との交流、PTAと児童対象の復興学習講演会の実施、ボランティア活動の推進のためにチョボラの日の設定などを行ってきた。その中でも被災地との交流（久慈市立久喜小学校と野田村生き生きサロンの方々）の実践を紹介する。



【実践の詳細】

久慈市立久喜小学校との交流

(1) 昨年度の交流・・・平成24年8月31日

まず、津波や地震の実態を知ることが大切と考え、最初に、久慈市立久喜小学校（全校児童65名）を訪問し、交流を持った。久喜小の皆さんから、「地震がおきたら津波が来ること、津波は1波、2波とくること」、「助け合う仲間がいるから立ち上がった」などたくさんのお話を学ぶことができた。

現在、磯観察や漁業体験が二年ぶりに復活し、それらの活動を通して、久喜小の子どもたちは、「もっと久喜の海が好きになった」と話していたことが印象に残った。

最後に「舳」というロープの結び方を久喜小の子どもたちから習った。「舳」というのは「絆」という意味もあるそうで、この機会に久喜小と西小の絆を深めていきたいと感じた。



(2) 今年度の交流・・・平成25年6月11日

昨年に引き続き、久喜小学校の子どもたちと交流を深めた。

今回は、久喜浜で一緒に、ムラサキウニの稚種の放流と磯観察を行った。ムラサキウニは、1年あまり育ったもので、えさになるこんぶがたくさん生えている磯に放流した。

磯観察では、引き潮で出現した潮溜まりに残された海の生き物を観察した。ゴソゴソ動くカニやヤドカリ、小魚の他に、おもしろい姿のアメフラシやなまこなどを見つけて大興奮。子どもたちは、1時間ほど思う存分観察を楽しんだ。

津波から2年3ヶ月あまり、久喜浜は力強く復活していた。



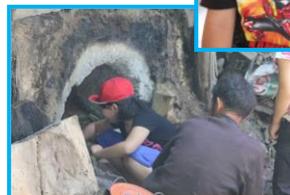
ウニの放流



磯観察

野田村生き生きサロンの方々との交流

- (1) 児童会計画委員会での話し合い・・・平成25年8月20日
交流が意義あるものとなるように、事前に児童会計画委員会で訪問内容を考えた。内陸の自分たちの学校のことを知ってもらいたいとの思いから「西小学校の学校紹介」をすることにした。また、お年寄りの方々と触れ合うために、「あったか握手」「あったか肩もみ」のゲームも考えた。
- (2) 炭焼き見学とプレゼント作り・・・平成25年8月28日
野田村生き生きサロンの方々の皆さんにプレゼントする飾炭(木炭消臭ポット)を作ったが、これは、5・6年生が学校近く的小林さんの炭窯を見学した際、いただいた炭を使った。子どもたちは、野田村のみんなが喜んでる姿を想像して、作った。
- (3) 訪問・・・平成25年9月4日
野田村で、全校児童が前田小路の生き生きサロンの方々20人と交流した。



学校紹介



高学年の子どもたちが、二戸西小学校の紹介をした

プレゼント



ゲーム

- ・最初のゲームは、人差し指同士をくっつけ、目を見て、「自分の名前」を話す。
- ・次のゲームでは、あくしゅをし、「朝から今までのこと」を話す。
- ・最後には、生き生きサロンの方々の、肩をもみながら「自分の将来の夢」を話す。

子どもたちへ

年寄りを楽しませてくれて、ありがとうございます。まごがいっぱい来てくれたようで、うれしいです。生徒さんたちと話をしていると若返るようです。

野田村の祭は、二戸から山車を借りておこないます。ぜひ、今度は、野田村の祭を見に来てください。
生き生きサロンメンバー

生き生きサロンの皆様へ

ぼくは、さいしょきんちょうしていました。でも、みなさんのおかげで、たのしくなりました。

ぼくのおばあちゃんもげんきになってほしいとおもいます。

ぼくたちが、げんきづけるはずが、ぼくたちがげんきづけられました。ありがとうございます。
1ねんせい

【まとめ】

- (1) 久喜小学校との交流を通して、津波の被害や避難の様子を知り、被災地の皆さんの思いを少しでも共有することで、今わたしたちが何をしなければならないのか考えることができました。
- (2) 生き生きサロンの方々は被災された方々が多く、まだ仮設住宅に入っている方もいたが、とても明るくてユーモアがあり、元気一杯で、そのたくましさと心の豊かさに多くのことを肌で感じとり、学ぶことができた。
- (3) これからも、いろいろな形で被災地との交流を続けていきたい。そして、被災した地域と被災しなかった地域とがつながり合い、相互に理解をしながら人と人とがつながって、心をつないでいけるような復興学習を模索し、実践していきたい。